文法的な文の類型が談話の主題展開に与える影響

砂　川　有里子

0．はじめに

人間がコミュニケーションを行う際にはその目的に応じて適切な言語形式を選択する。文の構造というのもそのようにして選択される言語形式の一つであるが，ある談話の中で実際にどのような文が用いられるかは，その場の状況の中で得られるいくつもの選択肢の中から，そのときの話し手のもくろみや，論理的な組み立てに関する志向性，あるいは文体的・審美的な感性や嗜好など，話し手個人の持つさまざまな要因を介して選ばれ，決定される。このように，談話における文の使用のありかたは，常に話し手の自由に任されており，話し手以外の者がそれを間違いなく一義的に予測するというようなことは不可能である。しかし，だからといって，その選択が話し手の完全な自由にまかされているというものでもない。談話で使用される文は，あくまでも文法という約束事の中で許された範囲の自由しか持ち得ない。したがって，話し手はその場のコミュニケーションに最も適切と思われる形式の文を，文法的な制約という枠組みの中で選び取らなければならないわけである。さらにその場合，単に文法的に正しい文を用いることだけが要請されているわけではない。談話で使用される文は，談話法に関するさまざまな約束事にも従がう必要がある。この種の約束事は，複数の，時として互いに衝突しあう談話の原理を調整して，どの原理に従うべきかを決めるものである。そこには，ボーグランデとドレスラー（Beaugrande and Dressler 1981）が述べるように，能率性（efficiency）と有効性（effectiveness）のバランスをはかる適切性（appropriateness）の原理が関わることになる。そしてこれらの原理は，ときとして文法的な約束事との間で軋轢を生むこともある。

このように，談話の中での文の使用は，文法や談話法という互いに「競合しあう動機」（Du Bois 1985）を調整しつつ，その枠の範囲内で話し手が最も好

ましいと思う形式を選び取るという形で行われているのである。そのために，当然のことながら，その選択にはある偏りが生じることになる。そしてその選択は，それまでにどのようなことが語られたかというそれ以前のコンテキストによって大きく影響を受ける。さらにまた，それに続く話をどのように進めていくかという，それ以降に展開する談話の道筋も視野に入れてなされるものである。そのため話し手によって選び取られた文の形式は，それ以降の談話展開にも何らかの影響を与えることになる。たとえば，文章を推敲するときなど，たったひとつの文に手を入れたために，その後の文章にも手を加えなければならなくなったようなことはないだろうか。それが仮に，助詞のハをガに変えるというようなほんの些細な変更であったとしても，その後の文章の書き方が変わってくるという経験をした人は少なくないはずである。

私たちが日常生活の中でごく普通に体験しているこのような現象は，なぜ生じるのだろうか。また，話し手の自由に任されているかに見える文形式の選択が，それ以降の談話の展開に一定の方向付けを行っているとしたら，それはどのような方向付けなのだろうか。さらにまたそのような方向付けが行われるのはどのような要因に基づくものなのだろうか。この種の問題について，これまでの研究は必ずしも十分な解答を与えていないように思われるのである。そこで，上記の問題の一端を明らかにするために，ここでは次に示すような予想を立てて，本稿での課題を設定することにしたい。

> 話し手によって選択された文によって，その後の談話の展開にさまざまな影響が及ぶものと思われる。その影響はランダムなものではなく，用いられた文の類型に起因する傾向が見られるはずである。そして，その傾向は大量のデータの中で，ある偏りとして現れてくるものと思われる。もしそのような偏りが観察されたなら，その偏りのあり方と文の類型との相関的な関係を分析することによって，文法と談話法とのかかわりが追求できるはずである。

以上のような予想をもとに，本稿では文の選択が談話の主題展開に及ぼす数量的な偏りを求め，それを分析するという課題を設定することにする。

ところで，この種の課題に取り組むには，問題となりそうな条件を限定し，その条件のもたらした結果をひとつひとつ吟味するということが必要となる。そのためには均一の条件のもとに集めた大量のデータが必要となるが，このよ

うなデータを自然談話の中で集めることは極めてむずかしい。そこで本稿では，「談話展開テスト」という実験を用いることにする。この実験は，特定の統語構造を持った文を含むテキストを被験者に提示して，その先の話を作文してもらうというものである。その作文データの分析によって，文の類型がその後の談話の主題展開に及ぼす影響を記述する。

以上のような方法によって，話し手の意図する意味を文の形で表現するという文法レベルの要請と，談話の一貫性を支え，なおかつ効果的な表現を求める談話レベルの要請とがどのように影響しあい，競合しあい，譲歩しあって，言語表現を決定していくのかという問題，すなわち「文法と談話法の接点」に位置づけられる問題について考察することにしたいと思う。

1．文の四類型

まずは談話展開テストで用いる文の類型を明らかにしたい。ここで問題にするのは次の文に代表される4つの類型である。

（1）　a．みち子はナイフをつかんだ。
　　b．みち子がナイフをつかんだ。
　　c．ナイフをつかんだのはみち子だった。
　　d．ナイフをつかんだのがみち子だった。

これら4つの文は『みち子がナイフをつかんだ』ということを表している点では共通しているが，次に示す4通りの方式で異なっている。

（2）　a……主語がハを伴う動詞文
　　b……主語がガを伴う動詞文
　　c……主語がハを伴う分裂文
　　d……主語がガを伴う分裂文

ここで「分裂文」と言っているのは，主語が補文で構成され，述語が補文から取り出された補語によって構成されるコピュラ文である。その構造は次のように示すことができる[1]。

1　分裂文にはその他に補文から取り出された従属節や副詞が述語となるタイプもあるが，本稿では(3)に示したタイプだけを問題とする。

（3）　[[みち子がナイフをつかんだ]$_S$の]$_{NP}$　は/が　みち子だった。

cとdは，コピュラ文の主語「ナイフをつかんだの」がハを伴うかガを伴うかという違いはあるものの，どちらも補文の中の補語がコピュラ文の述部に位置づけられており，上に規定した分裂文であると言える。一方，aとbのように分裂文でない通常の動詞文を分裂文と対比させて扱うときは「非分裂文」という用語を使うことにする。

以上に示したa～dの4種の文は命題的な意味は同じであるが，4つの異なった文類型によって表されている。その違いは交差する次の二つの要因にまとめることができる。

（4）　1．主語が主題化されてハを伴っているかどうか
　　2．分裂文であるかどうか

これを表にまとめると次のようになる。

表1　実験文の類型

	主語の主題化	主語の非主題化
非分裂文	a	b
分裂文	c	d

2．談話展開テスト

この実験の目的は，以上に示した4つの文類型がその後の談話の主題展開にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることである。

実験ではa～dタイプの文を含むテキストを被験者に与え，その先を作文させた。そこで用いたテキストは次の4つである。下線を引いた文は，それぞれa～dで示した文の類型に相当する。

（5）　Aグリーン館の舞踏会には，政界・上流階級婦人に加えて，村の娘たちの姿もあった。優雅なステップを踏む貴婦人たちとはにかんでたたずむ村の娘たち。グリーン館の女主人はこんなちぐはぐな光景を少しばかり冷めた目で眺めていた。

Bグリーン館の舞踏会には，政界・上流階級婦人に加えて，村の娘たちの姿もあった。優雅なステップを踏む貴婦人たちとはにかんでたたずむ村の娘たち。グリーン館の女主人がこんなちぐはぐな光景を少しばかり冷めた目で眺めていた。

Cグリーン館の舞踏会には，政界・上流階級婦人に加えて，村の娘たちの姿もあった。優雅なステップを踏む貴婦人たちとはにかんでたたずむ村の娘たち。こんなちぐはぐな光景を少しばかり冷めた目で眺めていたのはグリーン館の女主人だった。

Dグリーン館の舞踏会には，政界・上流階級婦人に加えて，村の娘たちの姿もあった。優雅なステップを踏む貴婦人たちとはにかんでたたずむ村の娘たち。こんなちぐはぐな光景を少しばかり冷めた目で眺めていたのがグリーン館の女主人だった。

これらのテキストは，内容から明らかなように「語り（narrative)」というジャンルに属するものである。冒頭の２文はすべてに共通しているが，下線を引いた最後の文はａ～ｄに示した４通りの方式で異なっている。以下においては，それぞれのテキストをＡ～Ｄの記号で表すことにする。また，下線部を引いた文はそれぞれＡ文～Ｄ文と呼ぶことにする。

さて，この実験の被験者は日本の大学と大学院に所属する284名の学生である。全員が日本語母語話者であるが，出身や年齢，性別，専門分野は一定していない。これらの学生を71名ずつの４グループに分け，それぞれのグループにＡ～Ｄのどれかひとつのテキストを割り振った。その上で該当するテキストをグループ内のメンバー全員に与え，次のような指示を行った上でその先の物語を作文させた。

（６）　この文章は物語の冒頭部分です。この先を好きなように展開して書いて下さい。ただし，中学生や高校生にも分かるような平明な文章でお願いします。時間は20分です。その間に完成させる必要はありません。時間切れで文が途中で終わっていたとしてもかまいません。時間を気にせず，好きなように書いて下さい。

被験者に与えたのは上記の指示だけで，この実験の目的は明らかにしていない。また，割り当てられたテキストを作文の際に参照することは妨げなかった。

テスト開始後20分経過した段階で，作文を回収し検討した。その結果，きわめて早い段階で放棄した者が1名いたため，その作文は採用しないことに決め，各グループが70名となるよう調整した。その際の調整は人数の多い3グループからランダムに1つずつの作文を取り除くという方法で行った。テストを放棄した1名の学生以外の作文はすべて誠実なものであった。得られた作文の長さにはバラツキがある。しかし，A～Dのグループごとに集計したデータを分析の対象としたため，個々のバラツキによる問題は生じないものと思われる。

3．データの処理法

実験結果の報告に入る前に，まずは観察対象の設定や測定法といった実験データの処理法について説明しておくことにしたい。

3．1．観察の単位と判定法

本研究でデータとするのは，A～Dの続きとして被験者が書いたテキストのうちの冒頭の1文である。

文を扱う場合，問題となるのは文の判定方法である。本研究ではこの点に関して，基本的には被験者が句点を打ったところで文が完結したものとすることにした。ただし，思考や発言の内容を表す引用構文（藤田2000）と呼ばれるタイプの文に関しては，かりに引用句の中に句点があったとしても，そこで文が終わったとは判定せず，引用構文が成立したあとの句点で文が終了したものとする。たとえば次の例を見ていただきたい。

（7） 「なぜ村の娘たちなんか招待しなければならないんだろう。」と女主人は思っていた。（B67）[2]

この例は，カギ括弧でくくられた引用句が助詞の「と」で受けられ，その後に引用動詞「思う」が続く引用構文である。引用句の中には句点が振られており，ここで文が完結しているかに見える。しかし，このような引用句は引用構文の

2 用例のあとに示した（ ）内の記号は実験データの分類を示すもので，A～Dは実験テキストのA～Dの区別，数字は回答者のID.No.である。

一部と考え，その構文全体を一文と見なすことにする。

ところで，思考や発言の内容を表す場合に，以上のような引用構文が用いられることの他に，引用構文の形をとらない次のような例も数多く観察される。

（8）　どうして場違いな村の娘たちが招待されているのだろう。壁の花になって誘いを待っているなんて，ひきょうな手だわ。踊れないならのこのこやってこなければいいのに。この女主人は，主人といってもまだ若く、亡くなった父の財産を全て受けついで広い屋敷に一人で暮らしている。（B53）

この例には4つの句点があるが，そのうちの3つ目までの部分が女主人の思考内容の引用である。この例の場合，引用された思考内容は引用構文をなしておらず，そのままの形で直接的に引用されている。このように引用構文を取らずに発言や思考がそのままの形で引用されるときは，一つ目の句点が打たれたところで文が完結したものと判定し，その部分だけを観察の対象とする。

以上に述べた文の判定法をまとめると次のようになる。

（9）　a．基本的には被験者が句点を打ったところで文が完結したものとみなす。

b．ただし，引用構文の引用句内に句点が打たれている場合はその限りではない。

c．思考内容，発言内容が直接引用されていて引用構文を形成していない場合は，aに準じて一つ目の句点で文が完結したものとみなす。

本稿ではA～D直後に書かれた文をデータとし，そこに現れた登場人物を観察することにする。次節では，観察対象とする登場人物について，その種類と観察法を示すことにしよう。

3．2．登場人物の種類と観察法

A～Dのテキストには，「優雅なステップを踏む貴婦人たち」，「はにかんでたたずむ村の娘たち」，「グリーン館の女主人」などの表現で示される3種類の人物が登場している。この後の談話には，これらの人物が引き続き登場するこ

とが予想されるが，その他に，新たな登場人物が出現する可能性もある[3]。そこで本研究では，先の3種に新たな登場人物を加えた4種類の登場人物を観察対象とする。これらの人物の表現形式はさまざまであるが，以下では次のカッコ内の用語を用いて表すことにする。

(10)　a.「女主人」……グリーン館の女主人
　　b.「娘たち」……村の娘たち
　　c.「婦人たち」……貴婦人たち
　　d.「新人物」……新たな登場人物

ところでこれらの人物を観察する場合，次のような問題がある。まず，すでに述べたように，観察対象となる文は，被験者によって長さに相当のバラツキがある。次に示すのは今回の実験で得られたデータの中で特に短い文と特に長い文の例である。

(11)　村の娘たちは，決して踊らない。(D12)

(12)　この館の女主人は，大変プライドが高く，また，自分の息子には，「ぜひとも，上流階級の貴女を…」というような考えをもつ女主人だったので，毎日，毎日，汗を流して農作物を作っているようなこぎたない村の娘たちが，この舞踏会に参加していることが許せなかった。(A39)

(12)は次に示すように，「ので」という接続助詞を持つ従属節と主節とに分けることができるが，このように長い文になると，同じ登場人物が何回も出現することになる。

(13)　**従属節**　この館の女主人は，大変プライドが高く，また，自分の息子には，「ぜひとも，上流階級の貴女を…」というような考えを持つ女主人だったので，

3　新たな登場人物は，先行談話と全く関係ない人物である場合（例1）と，先行談話で登場した人物と関わりのある人物である場合（例2）がある。
（例1）「楽しんでいらっしゃらないようですな。」そんな彼女に話しかけてきたのは，レッド氏だった。(A70)
（例2）女主人はそんな村の娘の中の一人がこちらをじっと見ているのに気が付いた。(D69)
前者はプリンス（1981）によって「完璧な新情報（brand new)」，後者は「繋がりのある新情報（anchored new)」と呼ばれているタイプである。本稿ではこれらを一括して「新人物」とした。

主節　毎日，毎日汗を流して農作物を作っているようなこぎたない村の娘たちが，この舞踏会に参加していることが（女主人には）許せなかった。

この例の主節では「女主人には」というハを伴うニ格主語が省略されているものと考えられるので，それを復元してカッコ内に示してある。以上の下線部が示すように，この文には「女主人」が4回も出現している。そもそもこの例のように，「女主人」が主節の中で主語として示されるときは文の主題となることが多く，それに続く並立節やそれ以前に述べられる従属節の中でも出現することが多い。従って，1文中に出現した回数のすべてをその人物の出現回数に数えると，結果的に主節主語の人物を数多く数えることになってしまう。そして，このことによって，被験者間における文の長さのバラツキが，各グループの集計結果に大きく作用するという危険が生じてしまう。このような事態を避けるために，ここでは出現頻度の測定を次の基準に従って行うことにした。

(14)　a．基本的には主節に現れた人物を1度だけ数える。従って，主節に1度現れた人物は，従属節や並立節などに現れても数えない。
　　b．ただし，主節に現れないで，従属節，連体修飾節，引用句など主節以外の節だけに現れた人物は，その中で初めて出現したときに1度だけ数える。

先に挙げた(13)の例では従属節「～ので」の中に「女主人」が3回出現しているが，それらは数に入れず，省略によって表現された主節のほうを出現回数に数え，そのときの表現形式を「省略」と記録しておくことにする。一方，従属節にしか出現しない登場人物の例としては次のようなものがある。

(15)　慣れない場での村の娘たちの姿を見ていると，女主人は自分の若かった頃のことを思い出すのであった。（A65）

この例の「娘たち」は，従属節「～と」の中には出現するが，主節には現れない。このように従属節，連体修飾節，引用句など，主節以外の箇所にしか出現しない人物の場合は，そこで現れた回数を1度だけ出現回数と認めることにする。

さらに1文の中に複数の異なる人物が出現する場合についても(16)の基準に従って記録した。たとえば次の例では，4人の異なった人物が登場している。

(16) 館の主が3年前に他界し，現在はこの女主人が忘れ形見の一人息子と共に，少数の使用人を取り仕切っていた。(C53)

このような場合は主節に最初に現れた「館の主」だけを記録する。

以上のような方式で，A～D直後の文に現れた登場人物を次の観点から記録し，分析することにする。

a．登場人物の出現頻度
- A～D直後の文に出現するか否か。
- 出現する場合，主節に出現するかどうか。
- 「女主人」の出現とその他の登場人物の出現との間に相関があるか。

b．登場人物の叙述の仕方
- A～D直後の文での叙述が属性叙述であるか事象叙述であるか。

c．登場人物の表現形式
- A～D直後の文に出現するときにどのような助詞を伴っているか。
- 出現するときの形式は省略，名詞，人称代名詞のうちどの形式か。

本稿では紙幅の都合から以上のaに関して論じることにしたい。

4．登場人物の出現頻度

ここでは，A～Dの直後に続く文の中に4種の登場人物それぞれが出現する頻度を観察し，その結果にもとづいて考察する。

4．1．「女主人」の出現頻度

A～Dいずれのテキストも，最後の文であるA文～D文は，「グリーン館の女主人がこんなちぐはぐな光景を少しばかり冷めた目で眺めていた」という命題を表している。「女主人」はその命題が表す出来事の動作主であり，「眺めていた」という述語の主格であり，それを述語とする文の主語である。Keenan and Comrie (1977) や Givón (1989) が指摘するように主題性のスケールの中で主格というのはかなり高い位置を占めるものである。したがって，それ以降の談話においてその指示対象が語り継がれる可能性はかなり高くなることが予想される。その上，その指示対象が無情のモノではなく有情のヒトであり，文の主語でもあるということが，「女主人」を次の談話に引き継がせる大きな圧力となっているものと思われる。

次の表はA～D直後の文に「女主人」が引き続き出現したかどうかを集計したものである[4]。この表が示すように，予想通り「女主人」はかなり高い比率で出現している。出現の最も少ないBの場合でも67%と優に過半数を超えているし，A～Dの平均値は76%という高い数値を示している。このように，A～Dすべての直後で，「女主人」は頻繁に語り継がれており，後の談話で安定した主題となる傾向の強いことが分かる。

表2　女主人の出現頻度

	出現あり	出現なし	合計
A	49 (70%)	21 (30%)	70 (100%)
B	47 (67%)	23 (33%)	70 (100%)
C	60 (86%)	10 (14%)	70 (100%)
D	57 (81%)	13 (19%)	70 (100%)
平均	53.3 (76%)	16.8 (24%)	70 (100%)

$\chi^2(3)=9.16$　$p<.05$

「女主人」の出現に関してもうひとつ特徴的なのは，主節に出現する割合が高いということである。次の表は，A～D直後の文の中で「女主人」が出現したときに，主節に現れるかどうかを示したものである。

表3　女主人の出現：主節と主節以外

	主節	主節以外	合計
A	40 (82%)	9 (18%)	49 (100%)
B	44 (94%)	3 (6%)	47 (100%)
C	58 (97%)	2 (3%)	60 (100%)
D	53 (93%)	4 (7%)	57 (100%)
平均	48.8 (92%)	4.5 (8%)	53.3 (100%)

$\chi^2(3)=8.67$　$p<.05$

この表が示すように，Aは82%，B～Cは90%以上という高い割合で「女主人」

4　%は小数点以下を四捨五入，平均値の数は小数点第1位以下を四捨五入して示してある。これ以降の表に関しても同様とする。

が主節に現れていることが分かる。このように「女主人」は主節に出現することが圧倒的に多いのだが，主節に出現するということは，その文の中で「女主人」を中心とした叙述が行われている可能性が高いということである。

以上のことから，A～Dの直後では「女主人」を中心とした叙述が行われる傾向にあることが分かる。すなわち，先に予測したように，「女主人」はそれ以降の談話において中心的な登場人物として語り継がれることが多いのである。

しかしながら，その出現の様子をさらに詳しく観察してみると，すべてが一様に同じ傾向を示しているというわけではないことが分かってくる。

そこで文の類型と「女主人」の出現頻度との関連を検討するため，表2において$\chi 2$検定を行った。その結果，出現頻度の偏りが有意であることが分かったため（$\chi^2(3)=9.16$　$p<.05$），残差分析を行ったところ，次の表4に見られるように「出現あり」のBが有意に少なく，反対にCが有意に多いこととが明らかとなった（$p<.05$）。AとDに関しては有意差が出なかったものの，「出現あり」はAとBが「－」，CとDが「＋」という結果となっている。

表4　表2の調整された残差

	出現あり	出現なし
A	-1.374	1.374
B	-2.021*	2.021*
C	2.183*	-2.183*
D	1.213	-1.213

*$p<.05$

つまり，非分裂文であるA文・B文よりも，分裂文であるC文・D文の方がその直後に「女主人」が語り継がれる頻度が高いのである。このように，A～D直後の文で「女主人」が語り継がれるかどうかは，そのテキスト末尾の文であるA文～D文が分裂文であるか非分裂文であるかによって明瞭な差異を見せている。A～Dすべてがその後に「女主人」を持続させる傾向が強いことはすでに見てきた通りであるが，その強さはすべてが一様のものではなく，末尾の文が分裂文であるほうがそうでない場合より持続させる頻度が高いわけである。

それではなぜ分裂文のあとのほうが「女主人」を持続させる頻度が高くなるのだろうか。次節では分裂文と非分裂文の語順という観点からその原因を探っ

てみることにしたい。

4．2．分裂文と語順

1節ですでに述べたように分裂文とは補文から補語が取り出され，それがコピュラ文の述部の位置で表現されている構文である。通常の動詞文では補語が動詞より先に表現されるのだが，分裂文では動詞よりあとに表現されることになる。ここには普通なら述語より前に来なければならない要素が述語の後ろに置かれるという語順の変更が観察される。

日本語は典型的なＳＯＶ言語であると言われており，述語が文末に位置している限り，補語や副詞の語順は比較的自由に変えることができる。しかし述語を文末以外の位置に移すのはそれほど自由ではなく，後置文（久野1978，ハインズ1982，高見1995）と呼ばれる次のような文は規範的な文法から逸脱していると感じられる。

(17)　うちに来たんだよ，山田さんが。

分裂文も文の構成要素を基本語順と異なった語順で表現するものである。その点は後置文と同様なのであるが，分裂文の場合に規範的な文法から逸脱していると感じる人はいないと思う。それは，分裂文が「～は～だ」「～が～だ」というコピュラ文の構造を持ち，文法にかなった形となっているからである。このように，分裂文は，述語を文末に置かなければならないという構文的な要請と，基本語順と異なる表現をするという談話語用論的な要請の，どちらも満たす形で表現できる構文として存在しているわけである。

今回の実験で用いたＣ文とＤ文では，補文の主格主語が文末の述部で表現されている。文末に表現された指示対象というのは最も記憶に残りやすく（Jarvella 1979），また後続の談話に持続されやすい（砂川2002）。今回の実験で，Ｃ・Ｄの直後のほうが「女主人」の出現が多かったという結果は，「女主人」が文末に位置づけられたことによってそれ以降の談話の中で語り継がれやすくなるという効果が現れたものと思われる。

4．3．「女主人」以外の出現頻度

表５～表７は「女主人」以外の登場人物，すなわち「娘たち」「婦人たち」「新人物」の出現頻度を集計したものである。

表5 娘たちの出現頻度

	出現あり	出現なし	合計
A	34 (49%)	36 (51%)	70 (100%)
B	34 (49%)	36 (51%)	70 (100%)
C	32 (46%)	38 (54%)	70 (100%)
D	29 (41%)	41 (59%)	70 (100%)
平均	32.3 (46%)	37.8 (54%)	70 (100%)

$\chi^2(3)=0.96$ ns

表6 婦人たちの出現頻度

	出現あり	出現なし	合計
A	14 (20%)	56 (80%)	70 (100%)
B	10 (14%)	60 (86%)	70 (100%)
C	13 (19%)	57 (81%)	70 (100%)
D	11 (16%)	59 (84%)	70 (100%)
平均	12 (17%)	58 (83%)	70 (100%)

$\chi^2(3)=1.01$ ns

表7 新人物の出現頻度

	出現あり	出現なし	合計
A	20 (29%)	50 (71%)	70 (100%)
B	22 (31%)	48 (69%)	70 (100%)
C	19 (27%)	51 (73%)	70 (100%)
D	18 (26%)	52 (74%)	70 (100%)
平均	19.8 (28%)	50.3 (72%)	70 (100%)

$\chi^2(3)=0.62$ ns

χ^2検定の結果，A～Dの条件による出現の偏りは有意でない。つまり，「女主人」以外の出現に関しては文の類型による影響は表れていないことが分かる。

次の表8～表10は「娘たち」「婦人たち」「新人物」それぞれの出現が主節かそれ以外かを集計したものである。

表8　娘たちの出現：主節と主節以外

	主節	主節以外	合計
A	12 (35%)	22 (65%)	34 (100%)
B	16 (47%)	18 (53%)	34 (100%)
C	17 (53%)	15 (47%)	32 (100%)
D	13 (45%)	16 (55%)	29 (100%)
平均	14.5 (45%)	17.8 (55%)	32.3 (100%)

$\chi^2(3)=2.21$　ns

表9　婦人たちの出現：主節と主節以外

	主節	主節以外	合計
A	8 (57%)	6 (43%)	14 (100%)
B	4 (40%)	6 (60%)	10 (100%)
C	6 (46%)	7 (54%)	13 (100%)
D	7 (64%)	4 (36%)	11 (100%)
平均	6.3 (52%)	5.8 (48%)	12 (100%)

$\chi^2(3)=1.50$　ns

表10　新人物の出現：主節と主節以外

	主節	主節以外	合計
A	11 (55%)	9 (45%)	20 (100%)
B	20 (91%)	2 (9%)	22 (100%)
C	16 (84%)	3 (16%)	19 (100%)
D	17 (94%)	1 (6%)	18 (100%)
平均	16 (81%)	3.8 (19%)	19.8 (100%)

$\chi^2(3)=12.44$　$p<.01$

χ^2検定の結果，表10以外は有意な差が現れなかった。したがって「娘たち」と「婦人たち」の主節での出現頻度に関してはA～Dによる影響がないことが分かる。一方，表10に関して残差分析を行った結果，次の表11に見られるように，Aの主節での出現が有意に少ないことが分かった（$p<.01$）。この点については4．6節で考察することにする。

表11 表10の調整された残差

	主節	主節以外
A	-3.432**	3.432**
B	1.393	-1.393
C	0.407	-0.407
D	1.653†	-1.653†

† p<.10, ** p<.01

4．4.「女主人」と「娘たち」「婦人たち」

「娘たち」と「婦人たち」は，前節での調査の限りではA文～D文による出現の偏りは観察されていない。しかし，このことから文の類型が「娘たち」と「婦人たち」の出現になんの影響も与えていないと結論づけるのは早計である。なぜなら，「娘たち」と「婦人たち」の出現を「女主人」の出現と関連づけて観察してみると，以下に述べるようなきわめて興味深い現象が観察されるからである。

多くの場合，「娘たち」や「婦人たち」が従属節に出現しているとき，「女主人」は主節に出現している。

(18) 慣れない場での村の娘たちの姿を見ていると，女主人は自分の若かった頃のことを思い出すのであった。(A65)

それに対して「娘たち」や「婦人たち」が主節に出現するときは「女主人」の出現のあり方に次の二つのタイプが観察される。ひとつは次の例が示すように，「女主人」が現れなくなる場合である。

(19) 一年に一度だけグリーン館の舞踏会に招かれる村の娘たちは，この舞踏会の日を楽しみに待ち望んでいるのだ。(A 8)

もうひとつのタイプとしては次の例が示すように「女主人」が同じ文の中に出現する場合である。

(20) しかし村娘たちはそんな女主人の気持ちも知らないでその日の夜は踊り続けた。(B20)

(20)では引き続き「女主人」が出現しているが，(19)の場合は「女主人」から「娘たち」に話が移っている。このように直前に出現した登場人物が語り継が

れず，別の登場人物に話が移ることを「談話主題の交替」と呼ぶことにする。

さて，表12と表13は「娘たち」「婦人たち」のそれぞれが主節に現れたとき，その文の中に「女主人」が出現しているかどうかを集計したものである。

表12　女主人の出現との相関：娘たち

	女主人の出現あり	女主人の出現なし	合計（100%）
A	1（8%）	11（92%）	12（100%）
B	8（50%）	8（50%）	16（100%）
C	12（71%）	5（29%）	17（100%）
D	9（69%）	4（31%）	13（100%）
合計	30（52%）	28（48%）	58（100%）

$\chi^2(3)=13.09$　$p<.01$

表13　女主人の出現との相関：婦人たち

	女主人の出現あり	女主人の出現なし	合計（100%）
A	0（0%）	8（100%）	8（100%）
B	1（25%）	3（75%）	4（100%）
C	3（50%）	3（50%）	6（100%）
D	4（57%）	3（43%）	7（100%）
合計	8（32%）	17（68%）	25（100%）

$\chi^2(3)=6.78$　$p<.10$

これらの表に示したとおりχ^2検定による「女主人」の出現の偏りは有意（表12）ないしは有意傾向（表13）である。そこで残差分析を行った結果，表14と表15に見られるようにどちらの場合もAにおいて「女主人」の出現が有意に少ないということが分かった。

表14　表12の調整された残差分析

	女主人の出現あり	女主人の出現なし
A	−3.377**	3.377**
B	−0.162	0.162
C	1.851†	−1.851†
D	1.434	−1.434

† $p<.10$，** $p<.01$

表15　表13の調整された残差分析

	女主人の出現あり	女主人の出現なし
A	−2.352*	2.352*
B	−0.327	0.327
C	1.084	−1.084
D	1.680†	1.680†

† $p<.10$，* $p<.05$

つまりAの場合だけ「娘たち」や「婦人たち」が主節に出現するときに「女主人」が現れないという傾向があることが分かる。その例をいくつか示すことにしよう。

(21) しばらくたっても村の娘たちはステップを踏もうとしなかった。(A45)

(22) 貴婦人たちはお互いに，形式ばったあいさつやお世辞などを交わしながら音楽に乗ってステップを踏んでいる。(A27)

(23) 村の娘達と貴婦人達では身につけているもの，そして何よりも舞踏会での振る舞い方が全然違うのであった。(A56)

表12と表13によると，「娘たち」の出現は12回，「婦人たち」の出現は8回で，合計20回の出現が観察されている。そのうち「女主人」が出現したのは表12の1回のみで，そのほかの場合はすべて「娘たち」または「婦人たち」に談話主題の交替が起こっているのである。

一方これとは対照的に，C～Dにおいては「女主人」とともに「娘たち」や「婦人たち」が出現する(24)のような例が少なくない。表13のBの場合は(25)の1例だけであるが，合計の出現数が4回と少ないため，この結果をもってBの傾向とするわけにはいかない。

(24) このちぐはぐな光景はグリーン館の女主人にとって目に余るものだったので，はにかんでたたずんでいる村の娘たちをダンスに誘ってみた。(C12)

(25) しかし娘たちはそんな女主人の気持ちもしらないでその日の夜は踊りつづけた。(B20)

以上の点から談話主題の交替という強い偏りはAだけに見られる特異な傾向であるということができる。そこで，次節においてはA文の類型について考察し，その直後に見られる談話主題の交替とA文の類型との関わりについて論じることにしたい。

4．5．主題のハと対比のハ

まずはテキストAを再び示すことにしよう。

(26)　グリーン館の舞踏会には，政界・上流階級婦人に加えて，村の娘たちの姿もあった。優雅なステップを踏む貴婦人たちとはにかんでたたずむ村の娘たち。グリーン館の女主人はこんなちぐはぐな光景を少しばかり冷めた目で眺めていた。

下線部が問題のA文で，主語がハを伴う動詞文である。そこで，以下しばらく助詞のハについて考えてみることにしたい。

よく知られているように，ハには主題を表す用法の他に，対比を表す用法というものがある。これらの二つの用法は，主題と対比の典型的な事例を両極として互いに連続的，段階的につながっているものであり，明瞭な形で二分できるわけではない。したがって，A文における「女主人」は，文の主題を示し，なおかつ対比的な意味合いを帯びたものとして解釈されることも可能である。しかも，このテキストでは直前に「娘たち」と「婦人たち」についての言及があるので，それらとの間で対比的な意味が生じる条件が整っている。

ところで対比というのは同じ類に属するものの中の異なったメンバーを比べるものである。したがって，対比されるもの同士は互いに何らかの意味で対等の資格を持つと見なされるものでなければならない。

さて，「娘たち」や「婦人たち」が従属節に出現する場合は「女主人」が主節に出現することになり，「女主人」のほうが高い主題性を持つことになる。しかし「娘たち」や「婦人たち」が主節に出現した場合，直前のA文における「女主人」がハを伴っていたことによって「女主人」と対比的に捉えられるようになる。そのため「娘たち」と「婦人たち」は「女主人」と対等の主題性を持つものとなり，その結果として「女主人」が主題の地位を退かざるを得なくなる。なぜなら，ひとつの節の中で対等の主題性を持つ二つの主題について叙述することは不可能で，一つの主題が選び取られたら，もうひとつは主題の地位を退かざるを得なくなるからである。このように，A文で談話主題の交替という現象が生じるのは，ハによる対比の意味ゆえに「娘たち」「婦人たち」と「女主人」との間で主題の競合が生じるためであると考えられるのである。そのような例をいくつか見てみることにしよう。

(27)　一年に一度だけグリーン館の舞踏会にまねかれる村の娘たちは，この舞踏会の日を楽しみに待望んでいるのだ。が，しかし普段の生活とはかけ離れた世界，うっとり目を輝かせて身動き一つできないでいる。

そんな村の娘たちの世界の実権をにぎる男，お金を持っている男，貴族の男との間に毎年必ずロマンスが生まれるのだった。（A 8）

この例ではA文で導入された「女主人」が語り継がれずに，「娘たち」に主題が移り，そのまま「娘たち」と貴族の男とのロマンスの話題へと発展していく。一方，次の例では「娘たち」に主題が移った後に「婦人たち」が出現し，「婦人たち」と「娘たち」との間で対比的な叙述が行われるようになる。

(28)　村の娘たちは娘たちで，普段とは違うキレイな服を着ている。そこへいくと貴婦人たちは，自分のドレスをまるで村の娘たちにでもみせびらかすかのように，そのスソをわざとヒラヒラさせてステップを踏む。娘たちは貴婦人たちのまわりをドレスにみとれながら立ちつくしているのだ。（A23）

このようにAの直後の主節に「娘たち」や「婦人たち」が現れたとき，「女主人」は主題の地位を維持できず「娘たち」や「婦人たち」と交替する。それに対してB～Dの場合は「女主人」がハを伴っていないため「娘たち」や「婦人たち」との間に対比的な意味合いが生じない。そのため，主節に「娘たち」「婦人たち」が登場しても，(24)(25)に示したように同じ文の中で「女主人」と共存することが可能となるわけである。

4．6．「女主人」と「新人物」

次に「新人物」の出現を「女主人」の出現と関連づけて調べてみることにしたい。次の表は主節に「新人物」が出現した文の中に「女主人」が出現しているかどうかを示したものである。

表16　女主人の出現との相関：新人物

	女主人の出現あり	女主人の出現なし	合計（100%）
A	10（91%）	1（9%）	11（100%）
B	10（50%）	10（50%）	20（100%）
C	12（75%）	4（25%）	16（100%）
D	13（76%）	4（24%）	17（100%）
合計	45（70%）	19（30%）	64（100%）

$\chi^2(3)=6.67$　$p<.10$

χ^2検定の結果，A～Dの条件による「女主人」の出現頻度の偏りは有意傾向であった（$\chi^2(3)=6.67$　$p<.10$）。そこで残差分析を行った結果，次の表17が示すようにBにおける「女主人」の出現が有意に低いことが分かった（$p<.05$）。

表17　表16の調整された残差

	女主人の出現あり	女主人の出現なし
A	1.643	-1.643
B	-2.397*	2.397*
C	0.473	-0.473
D	0.648	-0.648

*$p<.05$

この点については4．8節で論じることにして，ここではBを除く三つのグループ，中でもAに着目することにしたい。表16が示すようにB以外の三つでは「新人物」が主節に現れたときに「女主人」の出現する頻度が高い。その傾向は特にAに強く，11例中10例が「女主人」の出現する次のような例である。

(29)　すると村の娘の1人が女主人のほうへ近寄ってきた。（A2）
(30)　女主人の頭の中には，ある一人の少女が浮かんできた。（A31）

このように，A直後においては「新人物」の導入が「女主人」の出現する文に偏っている。前節ではA直後に「娘たち」や「婦人たち」が出現する場合，「女主人」の出現しない文に偏るという現象を確認したが，それとは反対に，A直後に「新人物」を導入するときは，「女主人」の出現する文に偏るという現象が観察されるのである。

4．7．ハのステージング効果

以上に述べたAの現象は，A文がハを伴う動詞文であるということに起因するものと思われる。A文は「女主人」がハでマークされている動詞文である。ハが文を越えて，さらにその後の談話に影響を及ぼしていくことは，すでに三上（1960：117～129）が「ハのピリオド越え」という表現で言い表しているが，このように，ハによって示された指示対象はその後の談話主題として持続する

ことが少なくない。同様にA文でも「女主人」がハで示されているために「女主人」の主題性が高まり，後続の談話で主題として持続しようとする圧力が強まったものと思われる。

4．5節で論じたように，「娘たち」や「婦人たち」の場合は談話に導入済みの指示対象であるために，「女主人」の伴うハの働きによって対比の意味が生じ，「娘たち」「婦人たち」「女主人」の三者それぞれが対等の主題性を持ち得るようになる。それに対して「新人物」の場合はA～Dに出現しておらず，あらかじめ談話の主題となる潜在性を手に入れているわけではない。そのため「娘たち」「婦人たち」が「女主人」と交替して談話主題となるのとは対照的に，「新人物」の導入はすでに談話主題として確立された「女主人」と関連づけた形でなければ行われなくなるわけである。

メイナード（1997）は物語におけるハとガの使い分けについて考察し，ハを伴う登場人物は物語を構成する中心的な人物としての役割を担っており，物語の中にコンスタントに登場して「話の展開の軸となり続ける（1997：107）」と述べている。メイナードはこれをハの「主題化」による「ステージング効果」と呼んでいるが，以上に見た現象もハのステージング効果の現れによるものであると言える。すなわち「女主人」がハを伴うことによって，それ以降の談話で中心的な登場人物として語り継がれる可能性が高くなったために，それまでに登場しておらず，主題としての潜在性を獲得していない「新人物」は「女主人」と主題交替することができず，主題性の高い「女主人」と関連する登場人物として導入されなければならないわけである。

ところで，4．3節において「新人物」が主節に出現するかどうかを調べ（表10，表11），Aの主節での出現が有意に少なくなっていることを報告した（p<.01）。この現象は「女主人」の出現が伴わなければ「新人物」が導入しにくいという上述の現象に起因するものであると思われる。Aの場合，「新人物」は「女主人」と関連づけて導入される必要があり，一つの文の中に「新人物」と「女主人」が同時に出現することになる。その際，A文でハを伴いすでに主題として確立されている「女主人」は，A直後の文で「新人物」よりも中心的な人物として表現されることが多く，勢い主節での出現が多くなる[5]。それに対して初めて導入される「新人物」はかならずしも主節に出現するとは限らず，

5　Aの直後で「新人物」が出現するのは20例であるが（表7），そのうち19例で「女主人」が出現し，うち17例が主節での出現である。このように，「女主人」はほとんどが主節に出現する。

「女主人」を中心とした物語の従属的な登場人物として従属節に出現する可能性も高くなるわけである。

以上，「新人物」導入の際にAの直後で「女主人」が主題として持続される傾向のあることを述べた。この傾向はAの直後が最も強く，ついでD，そしてCの順になる（表17）。一方，4．2節では，AとBの直後よりCとDの直後の方が「女主人」の出現頻度が高いことを報告し，その現象について，分裂文であるC文・D文の方が非分裂文であるA文・B文より「女主人」を主題として持続する圧力が高くなるためと結論づけた。この場合はA直後よりC・D直後の方が「女主人」を主題として持続する傾向が強いわけである。互いに相いれないこれらの現象はいったいどのように説明できるのだろうか。

その原因は，おそらく，CとDの直後では「談話を結ぶ機能（砂川2002）」が働く可能性があるためではないかと思われる。「談話を結ぶ機能」とは談話に一定の区切りを感じさせ，それまでとは違う新しい主題展開を可能にする働きのことである。砂川はいくつかの事例分析を通じてコピュラ文がこのような働きを持つことを論じている。今回の実験データでもC文とD文がコピュラ文の構文を持つために，一方では「女主人」を談話主題として持続する力を発揮しながら，他方ではその直後で談話に区切りを設けるという力も働き得たのだと思われる。C・D直後では「女主人」との関連なしに「新人物」を導入するということが，数少ない事例であるとは言え，A直後よりは多く観察された。これはC文とD文で「談話を結ぶ機能」が働いたことによるものであると考えられる。ここでは以上のような見通しを述べるだけに留めておいて，この問題についてのデータ分析を踏まえた考察については今後の課題とすることにしたい。

4．8．ガのステージング効果

この節では4．6節で検討を保留したBの問題について考えることにしたい。表17に見られたとおり，「新人物」が主節に出現するときの「女主人」の出現頻度はBが有意に低い（$p<.05$）。Bを除く三つの場合では，「新人物」を導入するときは「女主人」の出現頻度が高く，最も低いCにおいても75%を占めているのだが，Bにおける「女主人」出現の有無はちょうど50%ずつで，「新人物」の導入が「女主人」の出現と関わりなしに行われていることが分かる（表16）。Bだけに見られるこのような現象が生じた原因を求めるため，以下ではB文の類型が持つ特徴について考えてみることにする。

B文とは次に示すように「女主人」がガを伴う動詞文である。

(31) グリーン館の女主人がこんなちぐはぐな光景を少しばかり冷めた目で眺めていた。

すなわちB文は「女主人」が主題化されていない無題文であり，「現象描写文（仁田1991）」と解釈される文である。仁田によれば現象描写文とは，主観の判断作用を加えずに，ある時空に生起・存在する現象を言語表現化して述べたものである（p.36）。B文は，「こんなちぐはぐな光景」や「少しばかり冷めた目で」という評価に関わる表現が含まれているという点で解説的であり，典型的な現象描写文であるとは言えないものの，文全体としてはある特定の時空に生じた出来事をまるごと一つの現象として表現しているものであるから，現象描写文の範疇に属していると言うことができる。

さて，すでに述べたようにB直後に「女主人」が出現する割合は50%であり，「女主人」の出現なしに「新人物」が導入される次のような例が他の三類と比べて有意に高い（$p < .05$）。

(32) そんなはにかんでたたずむ村の娘たちの中にとても目をひく美しい娘がいました。（B36）

(33) そのうち一人の神士が村の娘たちの方に近より何事かつぶやいた。（B49）

前節ではハの「主題化」によるステージング効果に関して論じたが，メイナードはガに関しても「非主題化」のステージング効果というものを提唱している。メイナードによると，ガを伴う登場人物は，たとえ繰り返し登場したとしても，そのたびごとに「インスタントに再度登場させる（メイナード1997：107）」だけで，従属的な登場人物としての役割しか担えない。コンスタントにステージにいて話に一貫性を持たせるものではなく，登場するたびごとに新たにスポットライトを当てられる存在であるとされている。

上で観察した例においても，ここに述べられたガのステージング効果が現れているものと考えられる。すなわち，B文では「女主人」がガを伴っているために現象描写文として解釈されることになり，そのために物語の背景を構成する出来事の一部としてしか意識されなくなったものと思われるのである。

そもそも現象描写文というのは，出来事をまるごと一つの現象として提示するものである。このような場合，それ以降の談話において次のような二つの主題展開の可能性が考えられる。

まず一つは，現象描写文が「新たに現象を言語表現の場に導入する（仁田1991：36)」ものであるために，主語で示された指示対象が新たに導入された主題であると解釈され，それ以降で談話主題として語り継がれるという可能性である。この場合は，現象描写文によって新たに談話主題となる登場人物が導入されたことになる。B文がそのような機能を果たしたときは，後の談話で「女主人」を中心とした叙述が行われることになる。このように，現象描写文には，その後の談話に重要な主題を導入する働きがあるのであるが，そのほかにもうひとつ，これとは対照的な主題展開の可能性がある。

その可能性とは，現象描写文によって導入された現象が，まるごと一つの現象として捉えられ，物語の展開にとっては背景的な状況設定としての役割しか果たさなくなる場合である。この場合は，それ以降の談話における背景的な状況を提供する働きしかしなくなり，現象描写文の主語で示された指示対象がその後の談話で注目を浴びることはない。この場合がメイナードの提唱するガの「非主題化」によるステージング効果である。B文がそのような機能を果たしたときは，「女主人」が背景的な状況を構成する一要素としてしか意識されなくなり，後の談話で「女主人」の出現なしに「新人物」が導入される。

現象描写文の以上の機能とB直後の主題展開のあり方を図で示すとつぎのようになる。

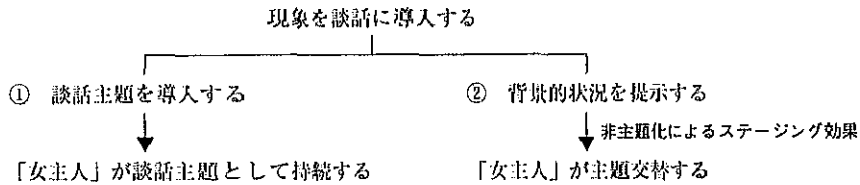

図1　現象描写文の機能と主題展開

現象描写文にはこのように，その後の談話の中で重要な主題となる指示対象を導入することもあれば，出来事全体を背景化させて，その後の談話の背景的な状況を提示するだけの働きしかしないこともある。B直後の「女主人」の出現が有意に低いことはすでに見たが（表17)，これはB直後で図1の②に示し

た主題展開が行われる可能性があるからである。B直後での「女主人」の出現は67%で，出現しない場合の約2倍である（表2）。このことから，今回の実験では図1で示した①のケースが②のケースの倍の頻度で起こったことが分かる。

5．まとめ

4節では登場人物の出現頻度に着目し，A～D直後の偏りがA文～D文の文類型に起因するものであることを論じてきた。以上をまとめると次のようになる。

まず，分裂文と非分裂文に関して述べることにしたい。A文とB文は非分裂文，C文とD文は分裂文である。この違いが反映した現象として，C・D直後のほうがA・B直後よりも頻繁に「女主人」が持続されるという現象が観察されている。これは，分裂文というものが，SOVという基本語順に抵触することなく，本来は文末に位置づけられる動詞を文末以外の場所に移動させ，動詞より前に来る名詞を文末近くに移動させる構文であることに起因する。分裂文は，後の談話で重要な主題となるものを文の後ろの部分で表現し，後の談話に持続させやすくする機能を持つものである。このような分裂文が用いられたため，後続の談話に「女主人」を持続させる圧力が高まったものと考えられる。

次に，主題化された文と主題化されていない文について述べる。この2つに関しては，動詞文であるA文とB文に見られる現象がその類別の違いを明らかにしている。特に，「新人物」を導入する際に，A文の直後でほとんどすべてに「女主人」が出現していること，それとは対照的に，B文の直後では「女主人」の出現しない場合が50%もあること，この二つの現象が主題化された文とそうでない文の働きの違いを明瞭に反映させている。すなわち，A文は「女主人」が文の主題として示されているために，その後の談話でも「女主人」を語り継ごうとする力が働く。そのために「女主人」と関連づけずに「新人物」を導入することが難しくなっているのである。それに対して，主題化されず現象描写文の解釈を許すB文の場合は，新しい主題を談話に導入するという働きの他に，そこで述べた事柄を背景化して示すという働きを持つ。前者の機能が発揮されたときは「女主人」がその後の重要な談話主題として語り継がれるが，後者の機能が発揮されたときは，「女主人」は単に背景的な出来事を構成する一要素としてしか意識されなくなり，新しい主題となる「新人物」が「女主人」

と主題交替するのである。

もうひとつ，A文には対比のハの影響だと思われる現象が観察されている。A直後の文で「娘たち」や「婦人たち」が出現するときに「女主人」との主題交替が起こるという現象である。A文では「女主人」がハを伴っているが，このハには主題を表す用法と対比を表す用法がある。このテキストではA文の直前に「娘たち」と「婦人たち」が導入されているため，「女主人」が対比の解釈を受ける可能性が生じている。そして「女主人」が対比の解釈を受けたとき，「娘たち」「婦人たち」は「女主人」と対等のメンバーとして意識されるようになり，「女主人」と主題交替を行うことになるわけである。

ところで，本稿で明らかにしたことは，今回の実験データだけに見られる特異な現象なのだろうか。あるいは語りというジャンルに共通して見られる現象なのだろうか。さらにまた，本研究から得られた知見は，語り以外のジャンルにまで一般化して論じることができるものなのだろうか。これらの問いに答えるには，さまざまなジャンルでの調査を通じて検討を重ねる必要がある。本稿での考察は，語りというジャンルにおける一つのケーススタディーに過ぎないものではあるが，構文的・意味的な文レベルの類型というものが，その文が使用された後の談話の主題展開という談話レベルの問題ときわめて深く関わり合っているものであることは，すでに明確に示し得たものと思う。

参考文献

井島正博（1988）「文の類型と事態の類型」『山梨大学教育学部研究報告』40：20-30.
久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店
砂川有里子（2002）「日本語コピュラ文の構造と機能」上田博人編『シリーズ言語学5・日本語学と日本語教育』39-70. 東京大学出版
高見健一（1995）『機能的構文論による日英語比較』くろしお出版
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
丹羽哲也（1988）「有題と無題文，現象（描写）文，助詞「が」の問題（上）」『國語國文』57(6)：41-58.
藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院
益岡隆志（1987）『命題の文法－日本語文法序説－』くろしお出版
三上章（1960）『象は鼻が長い』くろしお出版
メイナード泉子（1997）『談話分析の可能性』くろしお出版
Du Bois, J. W. 1985. Competing Motivations. In J. Haiman Ed. *Iconicity in Syntax.* Amsterdam : John Benjamins.
Givón, T. 1995. *Functionalizm and Grammar.* Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins.

Hinds, John. 1982. Ellipsis in Japanese. Carbondale / Edmonton : Linguistic Research, Inc.

Jarvella, R. J.1979. Immediate Memory and Discourse Processing. *The Psychology of Learning and Motivation*. 13 : 379-421.

Prince, E. F. 1981. Toward a Taxonomy of Given-New Information. In P. I. Cole Ed. *Radical Pragmatics*. London : Academic Press. 223-255.

本稿の内容は2003年3月1日にカリフォルニア大学サンタバーバラ校で行われたWorkshop on East Asian Linguisticsをはじめ，いくつかの研究会で発表した。そこで意見を下さった方々や，草稿を読んでご教示下さった方々，また，実験に協力して下さった方々に，心から感謝いたします。